



SUSAP 報告書

ハノイ外国語大学プログラム

参加者プロフィール

【朝倉隆平】団長

芸術地域デザイン学部

地域デザインコース 2年

日本と大きく文化的な違いがあるが深い交友関係で結ばれているベトナムに興味があり、また発展途上国に行ってみようという思いからこのSUSAPに参加。人、もの、食、風土あらゆる面でベトナムを感じることでできた充実した短期留学であった。



【井内 玲花】副団長

経済学部経済学科 2年

前回のインドネシア留学で

アジアの楽しさに気づき、

今回もアジアの国に行きたいと思いベトナムへ行くことを決めた。また、英語の力を試すことができると思ったのも参加の動機である。将来は海外と関わりのある仕事に就きたいと考えている。



【岩本夏月】

芸術地域デザイン学部

芸術表現コース 2年

芸術地域デザイン学部で染色

工芸を勉強中。ベトナムには高校生時代から興味を持っていた。工芸が生活用品やお土産などとして工芸らしく在ることや、いたるところに装飾への意志のようなものが見られることに特に関心を持った。また西洋や日本とは違った生活やエネルギーを実体験することも目的だった。



【百武 真心子】

芸術地域デザイン学部

地域デザインコース 1年

将来の地域の発展に携わ

りたいという夢の役に立つのではと思い参加を決意。行ったことのない国風の国に行き、海外の観光について学びたいとお思ったのも参加の動機である。ベトナム



ムにはバッチャン焼きがあり、有田焼がある佐賀と繋がる場所があるのではないかと思います、ベトナムに関心を持った。

【安川 理澄】

芸術地域デザイン学部

地域デザインコース 1年

将来の夢が記者であり様々な

地域の特色や景観に興味があった。今回は留学を通して東南アジアの文化や歴史を現地で見聞し、日本とは違った街づくりや景観の違いを肌で感じたいと思い、参加した。英語能力の向上も目的の一つであった。



【北林 陽良】

理工学部理工学科 1年

ベトナム料理が食べたいという

単純な理由で本研修への参加を

決意。また、日本とベトナムの価値観の違いを体感したいと思ったのも参加の動機である。現地の学生と仲良くなって交流の輪を広げたいと思ったのも動機の一つだ。



【川端康平】

理工学部理工学科 1年

今急激な成長を遂げている

ベトナムハノイに行くことで

自分の視野を広げたいと思い

留学を決意。将来は建築士を目指しており、中国やヨーロッパに影響を受けたハノイの町並みや建物をこのため確かめ、街全体の空気感を肌で体感したいという目的を持って本研修に参加した。現地では、5回ほどベトナム人だと間違われた。



プログラム概要

【期間】2019年9月15日～2019年9月29日（15日間）

【留学先】ハノイ国家大学外国語大学

Phạm Văn Đồng, Dịch Vọng Hậu, Cầu Giấy, Hà Nội,

【内容】ハノイ国家大学外国語大学にて、午前中はベトナム語の学習をし、午後は、ハノイ市内の様々な歴史的な場所へ行き、見聞を深めた。このプログラムを通じて、ベトナム文化への理解、ベトナム語の習得を目指した。

ハノイ外国語大学について

ベトナム国家大学ハノイ校は1993年に設立。1993年にハノイ総合大学、ハノイ師範大学、ハノイ外国語師範大学という3つの大学を統合し、ベトナム国家大学ハノイ校になった。その3つの大学の中、ハノイ総合大学の前身はインドシナ大学（東洋大学）であり、設立されたのは1906年5月16日であり、ベトナムで初めて作られた大学という説もある。今回私たちが留学したのはベトナム国家大学ハノイ校の7つの中の一つ、ハノイ国家大学外国語大学であり、1955年に設立された大学である。

授業

私たちはハノイ外国語大学で二週間で計10回のベトナム語の授業と計6回の学外研修を受けた。授業は9時からだった。ベトナム語は Phan Thị Huyền Trang 先生、Nguyễn Thu Hồng 先生、Nguyễn Việt Hoà 先生の3人から学んだ。その中で日本語を話せるのは Hồng 先生だけで二人の先生はほとんど日本語を知らなかった。そのため、授業は基本的には英語で行われることが多かった。英語でベトナム語を学ぶことはとても難しかったが、先生方が易しい英語を使ってくれたのでなんとか理解することができた。内容は数詞や自己紹介、基本単語、レストランでの注文の仕方など簡単なものであったが、ベトナム語特有の発音がとても難しかった。午前の授業が終われば、博物館や、水上人形劇やホーチミン廟などたくさんベトナムの文

化や歴史に触れ合える場所に行った。二週間という短い期間ではあったが、私たちは毎日ベトナム語を勉強し、また由緒ある場所へ出かけた。とても充実したプログラムであった。

日本人7名に対し、ベトナム人の学生ボランティアは6人であった。ボランティアたちは日本語を専門的に学んでいるため私たちはほとんど日本語でコミュニケーションをとった。私たちが授業が終わると教室まで迎えにきて昼ごはんに連れて行ってくれたり、日本人だけでは危ないからと言い大学の近くのマーケットに連れて行ってくれたりした。平日だけでなく休日も彼らは私たちの行きたいところへ案内してくれた。そのためボランティアたちと二週間会わない日は1日もなかった。とても深い絆が生まれた。

	AM	PM
9/15		Arrival at Noi Bai Airport, Hanoi Pick up → Hotel check in
/16	Welcome Ceremony at University and Campus Exchange meeting with Buddies Vietnamese traditional game	
/17	Vietnamese Lesson 1	Hanoi Old town & Water Puppet Theater
/18	Vietnamese Lesson 2	Vietnam Museum of Ethnology
/19	Vietnamese Lesson 3	Bat Trang Ceramic Village
/20	Vietnamese Lesson 4	Vietnamese Lesson 5
/21	Hanoi → Trang An	Trang → Hanoi
/22	Silk Village	Old Town
/23	Vietnamese Lesson 6	Temple of Literature
/24	Vietnamese Lesson 7	Trang Long Imperial Citadel
/25	Vietnamese Lesson 8	Ho Chi Minh's vestige in the Presidential palace area
/26	Vietnamese Lesson 9	Preparation for presentation
/27	Vietnamese Lesson 10	Farewell Ceremony
/28	AEON	Old city
/29	Check-out Departure from Hanoi	

ハノイでの生活

交通手段

ハノイで最もよく使われている乗り物はバイクである。道路を走っている8割がバイクであった。ハノイ国家大学外国語大学のほとんどの学生も通学にバイクを使用しており、キャンパス内の駐車場は、バイクで埋まっていた。ベトナムでよく使われているバイクだが、バイクは安全でとても便利だと二週間で感じた。バイクが多すぎて1台1台のスピードがあまり出していない。また、ベトナム人はバイクに慣れているため運転が上手であった。バイクが使えない私たちが良く使用していたのは個人タクシーのようなサービスだ。ベトナムでは、スマートフォンの「Grab」や「Bee」というアプリで、自分たちの居場所と目的地を記入しタクシーを呼ぶ。位置情報サービスでタクシーの場所を確認し、近くに来たら運転手から携帯に連絡が入る。

そこでタクシーの詳しい位置を確認後、自分たちでタクシーを見つけ乗り込むというシステムだ。中距離を移動する場合のほとんどにこれを利用した。料金は10,000ドン/1km(約46円)である。「Grab」や「Bee」は、バイクタクシーの利用もでき、バイクタクシーはタクシーよりさらに安く利用可能だ。

ハノイでは地下鉄や水運が発達していないため、タクシーの次に多いのはバスである。長距離移動でバスを利用した。乗り方は日本と少し異なり、バスが来て、モタモタしていると乗り遅れてしまう。必死で乗りこみ席に着くと、バスの係が運賃の回収に来る。基本的に一律7,000ドン(約32円)。支払うとチケットが貰える。印象に残ったことは、お年寄りにとても親切だということだ。ご年配の方が乗り込むと席に座っていた人は席を空ける。また係の人がご老人のために席を確保していたりと、日本より高齢者に対する敬意があると感じた。

食事

ベトナムは主に米が主食で、米の麺(Bun)を使った料理を出す店が多いと感じた。味付けは濃い味ではなかったのも、口に合わないということではなかった。日本人好みの味付けで食べやすかった。だが、口に合わない食べ物もあった。まず、フォーなどの料理にトッピングとして必ず付いてくるパクチーである。日本ではそれほどメジャーではないが、ベトナムではどの料理にも付いてくる程頻りに食べられている。次に、ホテルの朝食で出たバインミー(パンに具を挟んだもの)である。パンがパサパサで水分が持っていられる程だった。だが、同じバインミーでも美味しいバインミーもあった。それは大学のMr. CAYという売店で売っているバインミーである。パンはサクサクで、焼きたての鶏肉や豚肉を挟んでいても美味しかった。佐大生に人気のベトナム料理はフォー(米の麺を使ったラーメンに似た料理)やブンチャ(米の麺を使ったつけ麺に似た料理)、チェー(プリンやタピオカなどがココナッツミルクに入っている氷を混ぜて食べるスイーツ)などだった。道を歩けばレストラン、屋台があり、道端で屋台で焼き鳥な

ど手軽に食べられる物を売っている人も見受けられた。これらを見ると日本より食事という行為が生活に密着していることが感じられた。

まとめ

今回二週間のSUSAPの研修でベトナムに行き、午前中はベトナム語の授業を受け、午後は現地学生と一緒にベトナムの観光地を訪れ、ベトナムの異なる価値観を持つ人々と触れ合うことで、それぞれが新たな価値観に気付かされたと思う。日本にいただけでは気付くことのできないことが数多くあった。また、またハノイ国家大学外国語大学のボランティア学生と深く交流ができた。ボランティアはみんな日本語、英語が堪能であり、改めて日本人の言語力のなさを痛感した。様々な局面で私たちをサポートしてくれたボランティア学生のおかげで安心して行動することができた。この二週間で学んだことを生かし、これからの語学力向上に勤んでいきたい。

「ハノイで学んだこと、感じたこと」

芸術地域デザイン学部 2年 朝倉隆平

私はハノイ外国語大学プログラムに参加して、2週間という短い間でしたが、少しだけベトナムがどういうところなのか知ることが出来ました。私がベトナム（ハノイ）で感じたこと、学んだことについて書いていきたいと思います。

まず、ハノイに着いて感じたことは、当たり前なのですが「あー、海外だな。」ということです。私は、以前韓国と香港に行ったのですが日本と風景や気候にあまり違いを感じられませんでした。しかし、ベトナムは日本と風景、気候に違いを感じられました。空港を出ると見渡す限りバナナなどの亜熱帯植物が生えており、読めないベトナム語の標識があり、そして、気候はサウナの様な暑さでした。違いはこれだけではありません。ベトナムと日本の大きな違いは道路事情だと私は思いました。数えきれないほどのバイクで埋まる交差点では、赤信号でも車、バイクが止まらず信号が意味をなさないため、警察官が交通整理を行ったり、歩道をバイクが走行、逆走も日常的に行われたりしていました。しかし、そんなカオスな道路事情でも不思議と事故も目にすることなく、ちゃんと機能していました。初めはバイクに轢かれなしかと横断歩道を渡ることがすごく不安でしたが、日を追うごとにベトナムの道路事情に慣れていき、最後のほうには不自由なく道路を渡れるようになっていました。

次にベトナムで特に楽しかったこと、逆に楽しくなく苦しかったことについて述べようと思います。特に楽しかったことは、ベトナム人学生とダーカウと呼ばれる蹴鞠の様な遊びをしたことです。ダーカウは、蹴鞠と言っても鞠ではなくバトミントンの羽の様な形をしていました。それを2つのチームに分かれ、足でけったり掌で打ったりして、ラリーをつづける遊びをしました。とても単純な遊びですが、ショッピングセンターの広場で夜にみんなで盛り上がったことは、一生ものの

思い出となりました。旅行でベトナムに来ていたら、多分そんな遊びはしなかったと思うので、このSUSAPに参加できてよかったなと思う一つのことでもあります。逆に苦しかったことは、食中毒です。私は、ベトナムに来て2日目あたりからおなかが痛くなっていました。しばらくは、日本から持ってきていた薬で症状を抑えていましたが、日を追うごとに悪化していき、頭痛、嘔吐、下痢、発熱と苦しめられました。病院に行こうか迷いましたが、まずは薬局で薬を買って治そうと思い、薬を買おうとするも希望の薬が手に入らず、結局気合で治しました。ほとんど薬を使わなかったので完治に1週間ほどかかってしまいました。後で分かったのですが、現地の薬局では食中毒に劇的に効果を発揮するいい薬もあるみたいなので、もしベトナムに行かれる場合は、日本から気持ち多めに薬を持って行っておくか、ベトナムの薬についての予備知識をつけておくことをお勧めします。ですが、ベトナムでは、食中毒になるという危険性がありますが、基本どの料理もおいしかったです。200円しないくらいの値段でフォーやチャーハン、生春巻き、ブンチャーを食べることが出来ました。肉が多いですが、野菜も多いのでヘルシーに感じられ、味付けも日本とは違いますが優しく食べやすかったのが特徴です。また、バインミーと呼ばれるホットドッグが大学内で売られていたのですが、これが1個100円で量も多く、とてもおいしかったです。「佐賀大学にもこのような店があればいいのに。」と思いました。

それから、ベトナム語の授業についてここからは、述べていこうと思います。ベトナム語の授業は基本午前中に全10回行われました。最終的に何も見ずに自己紹介をベトナム語で行えるようになるというのを目標に学習しました。比較的優しい内容でしたが、日本語と発音が大きく違うので、単語を言っても伝わらないということに苦戦しました。文法も、日本語と英語の中間といった感じで新しい感覚でした。また、自己紹介だけでなく、数の数え方、値段の聞き方、道の聞き方など

を学びました。学んだことは、どれも実際に外に出て使ってみるというアクティブな授業もありました。ゆっくりと丁寧に発音するとちゃんとしっかり聞き取ってもらえて、会話が成立し、どこの店員さんも笑顔で返してくれたのが印象に残っています。

最後に、私が感じたベトナムと日本のつながりについて述べていきたいと思います。現在ベトナムと日本は友好関係を築けていますが、それはハノイ市内の様々なところで感じる事が出来ました。バッチャン村という焼き物で有名な村のある施設には、JICA（独立行政法人国際協力機構）のおかげでつくられましたという表記があったり、ある大きな橋が日本の協力によってつくられたという事実を多くの人が知っていたりするということがありました。街中を見ても、多くの日本製の車、バイク、家電、スーパーマーケットなどが見受けられ、ベトナム人の日本への親しみを感ぜられました。このことをもっと多くの日本人が知り、両国の人々の交流がもっと盛んになったらいいなと思います。

このように私は、このプログラムを通してより深くベトナムを知ることが出来たと思います。何より一番の収穫は、ベトナムの人と直接いろんなことを話して、友達になれたことです。来年もSUSAP ハノイ外国語大学プログラムが行われ、さらに参加者が増えたらいいなと思います。ハプニングはありましたが非常に充実した二週間をベトナムで過ごすことが出来ました。



佐賀大学とハノイ外国語大学のみんな

「共流」

芸術地域デザイン学部芸術表現コース 2年

岩本 夏月

ベトナムには高校生時代から漠然と興味を抱いていた。それがなぜなのか今でも全て説明しきることではできないが、その生活風景を垣間見たときに色彩豊かな世界に惹かれ、またどうしてこのような風景を生みその中で生きているのだろうと気になったことは一つのきっかけだったように思う。その後また一つ、日本人との外見（体格や顔つきや動きなど）の近さや、どこかの本で読んだ言語構造が近いという話から、自分達に通じるところの多そうな人々に会ってみたい、その中で比べたり体験したりすることで人間に共通する部分、もしくはやはり違うなという部分から自らのアイデンティティを探りたいと思ったこと、そしてもう一つ、アジア美術館を訪れて以来、その作品群に惹かれ、どの地域の美術よりも自分に迫るものを感じ、アジアの美術とそれを生み出したり愛でたりするための感覚に興味を抱いたことが、その思いを強くした。更に、今年から染色工芸を専攻として勉強するようになり、布製品や焼き物などの工芸品が、生活やお土産として様々な機能を果たしている現場をみることで、自分が工芸とどう付き合おうか、自分の好きなことをどう社会につなげていこうか、また、装飾はどのように機能するのだろうか、などと考えていく材料のひとつになるのでは無いかと考えたのも理由の一つであった。

実際にベトナムに着いてすぐに実感したことは、とにかくエネルギーで混沌としているということである。テレビや本で見聞きする以上の感覚だった。それでいて成り立っているあの街は不思議だった。ベトナムの交通は水のようなものである、と本で読んだが、交通に限らず色々なものが絶妙な塩梅でぎりぎり成り立っている感じがした。街の風景について特に思ったことは、やはり色彩や装飾性について、それこそ混沌としているのにそれとして成り立っているものだ。近代的なビルでさえも日本で見

ものよりも個性的である。日本と前提のようなものが違う気がする。見えるものに視覚効果を与えるのが当たり前だという感じである。お店の中でも、壁にイラストが描いてあるのがスタンダードで、更に大抵電飾や花などで飾られている。以前から、人間には空いているところを埋めるというような装飾への意志が備わっているのではと思っていたが、まさにそれを感じさせるような世界であった。またその意志が正直に現れているようなところだから、工芸も自然に存在するのではないかと思う。そして、みんながある意味クリエイティブなのかもしれない。道路空間を使って飲食店や散髪屋を作ってしまうくらいだ。いいか悪いかは置いて、その空間に可能性を見いだしてしまうのはクリエイティブなことではないか。

生活をしていくうちに日本との大きな違いを感じたのは食生活についてである。ベトナムの食生活は、日常から時間的にも空間的にも、日本や欧米諸国ほど隔たっていないような感じがするのだ。日本だと、お昼の時間だ、さあ食べるぞ、となるあの感じが薄い気がする。もちろん三食私たちと同じような時間通りに食べているし、お昼に何を食べようか、ということもしっかり考えていたのだが、何かが違う。一つは、ベトナムの食事情として、農業国故に食料が持続的に確保できていることがあると思う。食に対しての危機感のようなものがあまり感じられない。(南国というのはそうなのかもしれない。よく北国と対比して言われる性格傾向に通じることかと思う。) もう一つ、これは生活全般に感じたことだが、切り替えのスイッチみたいなものがありすぎないな、と思った。そういえば何にでもそのようだった。何にしても、また、水のようにするりと行動が移っていく感がある。街がそうさせているのかもしれないし、だからあのような街ができているのかもしれない。私は、ベトナム人は勤勉だ、真面目だ、などと聞いていたので、もっとかっちりとした生活感を想像していたのだが、その想像はだいぶ違った。気軽だが、行動的だ。(もしかすると今回関わった人々が特にそのような性質を持っているの

かもしれない。) しかしこれはすごくいいことだと思った。日本人が取り入れたらもっと彼らのようにエネルギーになれるのではないかと思う。水のように、だからこそするりと流れていくことができるという感じである。私だけかもしれないが、日本人は、ねちねちしすぎ、重すぎて、動きにくい部分があるのでは無いか。これは味でもあり、苦しいところとも言える性質かもしれない。

ベトナム語は、全く話せない状態で入国した。そこから日常で使える入門的なベトナム語を学んでいったが、当然普通に生活するには最初から最後まで不十分な会話力だった。しかしそんな中で暮らしていて気づいたのは、甘いかもしれないが、「意外となんとかなる」ということだ。鳴き声のように音を発し、身振り手振りをし、現代では更にインターネットも活用すれば、完全に思い通りにはいかなくとも、なんとなく事を進めることができちゃうのだ。これは私の中で勇気や希望のようなものになった。そしてこのような状況下では、互いに理解しよう、なんとかしようとする優しさや情熱に心が温まる気持ちがあった。コミュニケーションにおいて大事なものを改めて感じた。そもそもベトナム人は大抵、心から、優しく、「おもてなし」精神が素晴らしいと感じた。日本の、教育された、形としての、とも言えるようなおもてなし精神とはまた違う。心で、という感じがする。それに敬意を持ってきているのを感じる。この精神を、私も見習わなければならない。彼らの本心を覗きこむことはできないから言い切ることはできないが、装飾への意志の表出といい、日本よりも素直に表現し合うような気質があるのかもしれない。そしてそのような中で共生することに慣れているのかもしれない。

工芸や芸術について言うにしても、エネルギー、装飾、水、表現、などと前述のような気質つながる話になりそう。芸術について付け加えて述べるならば、戦争を経験したことと、社会主義国であるということが、芸術のあり方に大きく影響しているのだろうということだ。ホーチミン博物館(ロシアもそのデザインに関わっているという)を訪れた

時にその特殊な芸術像を感じたのだ。しかし今回残念ながら美術博物館を訪れることもできず、これについて分析するには材料が足りない。機会があればここをもっと掘り下げてみたい。個人的に、プロパガンダポスターのデザインが好みで、これは、デザイン成果物の在りかという意味でも、特にもっとみてみたい。

彼らや彼らの社会と自分の間に違いを感じることもあった。だがそれ以上に同じ人間であることを一番強く実感した。国がどうこうよりも私とあなたがどうだ、という問題だとも思った。そして一番は、優しく素直でありたいと思った。ベトナムからこれほど内面に刺激を受けると思っていなかった。これが結局、人と人の交流、自分と自分の行き来にとっても、最も肝心なのではないか。

考えたことはまだまだあるが、あとは自分の日記にまとめるとしよう。そしていつか形に出るように自分に活かしていきたい。お世話になった、いろいろなことに気づかせてくれたベトナムの人々に感謝したい。



装飾的な楽しみを見出せるカオスな食卓

「ベトナム留学を通して」

経済学部経済学科 2年 井内玲花

今回2度目となるアジアでの留學生活を振り返ってみると、どの瞬間も一度目のインドネシアとはまた違った新たな発見や経験がたくさんありました。私はベトナムのことについて、高校時代の世界史で習う程度の知識しかありませんでした。

また、自発的にベトナム語を学びたいと思うこともなかなかありません。ですが、SUSAPの募集を見たときにアジアであり親日国かつ発展しているベトナムに惹かれました。想像しにくい面がたくさんあった分、いろいろなところで驚かされました。とても濃い2週間を思い出していきたいと思います。

まずは学習面です。私たちは平日の9時から11時30分または12時までベトナム人の先生によるベトナム語の授業を受けました。3人の先生方から教わり、中には日本語が少しできる先生もいらっしゃいました。基本的な自己紹介からホテルや買い物、レストランで使うことのできるセンテンスや、モノや色の名前、数字の読み方などを勉強しました。想像以上に難しいことが初日から感じられ、それは最終日まで変わることはありませんでした。聞きなれない単語が多く、覚えにくいものが多かったです。また1番苦戦したのは発音でした。日本では重視されない声調が多く使われ声調によって意味が変わる単語も多く、私たちにとって身近ではなく意識もしてないため違いが分かりにくかったり、言っているつもりでも伝わらないことが多かったです。そこが1番の課題だったのではないかと私は思います。実際に大学の売店で注文を試みたり、大学内にいる学生に道を尋ねたりと実践的な練習もしました。ベトナム人はみんな温かく、耳を傾けてくれたためになんとか理解してもらうこともありましたが、実際に万人に通用はしないだろうと思います。そのぐらい難しいものでしたが、その分やりがいも強く感じられました。また、現地の人にベトナム語を理解してもらえた時の嬉しさはこれまでにないほど大きなものでした。

次に生活面です。授業が終わった後の午後や土日には歴史ある観光地に先生とバディのみんなと一緒に行きました。有名な焼き物を間近で見体験したり、世界遺産に行ったりと貴重な時間ばかりでした。昔、ベトナムは中国の支配を受けていただけあって、建物の様式がお寺のようなものが

多く漢字も多用されていました。現在のベトナム人は読むことはできないけれど、歴史的な文書や建物の入口にはたくさんの漢字があり、現在使われていない読めないものもありました。また、フランスの支配を受けていた歴史もあるためヨーロッパのような建物も街でかなり多く見られました。日本ではあまり外部の文化を意識して生活していないけれど、アジアは特にどこかの国に植民地とされていた時代があるためにいろんな文化が混ざりあっているということがはっきりと見えました。文化が混合しながらも独自の文化が出来上がっていった様子も見る事が出来ました。日本にいとそこに視点は置いて生活していないし、新たな観点であり発見でした。

また、生活する上での圧倒的に多い交通手段はバイクです。歩行者は歩道を歩くのも危ないし、信号が青になっても道路は渡れないし日本では考えられないものでした。また、タクシーやバスも普及していましたが乗ってみると日本と違って安全運転とは言いにくいものでした。しかしとても安い値段で利用することができ、バスに関しては1回の乗車 7000 ドン、日本円に直すと約 35 円という破格でした。物価は日本と比べてとても安く、日本で食べる 1 食分でベトナムの 3 食分を賄えるぐらいでした。

次に食事面です。ベトナムと言えばフォーという有名な食べ物がありますが、それ以外にもお米を使った麺を中心にたくさんの美味しい料理がありました。優しい味付けで日本人の口にも合うと思われまます。仏教徒が多いため、肉は牛豚鳥全部ありました。しかし一番驚いたのは鳥が丸焼きで売ってある屋台と同じく並んで犬が丸焼きにされて売られていたことです。バディに聞いてみると、昔はよく食べていて今でも食べる人がいると言われました。ベトナムの街を歩くと、放し飼いにされている犬とよく遭遇していたこともあって余計に驚きました。また、スーパーには食用の虫も売られていて驚きの連続でした。

最後にベトナム人についてです。バディのみんなは日本語学部の学生だったため、本当に日本語が上手で驚いたと共に英語も話せて、中には4ヶ国語話することができる人もいました。何もわからない私たちにずっと付きっきりでたくさんのことを教えてくれたり、心配してくれました。たった2週間しかいない私たちにとても尽くしてくれて、逆の立場だったら日本人はここまでするのかと疑問に思いました。勤勉さであったり、優しさと思いやりの精神は日本人も見習わなければいけないなと思いました。また、ベトナム語では自分が相手より歳上なのか歳下なのかで呼び方が変わってくるため、最初に年齢を聞きます。その話だけ聞けば上下関係が厳しいことを想像しますが全くそうではなく、生徒間を飛び越えて先生ともすごく親しい様子でした。そこからも日本より楽観的で温かいものを感じました。



Vạn phúc にて

「ベトナムでの経験を通して」 芸術地域デザイン学部地域デザインコース 1年 百武真心子

私は今回のハノイ国家大学外国語大学への留学を通して、様々な国家状況の国があることを知ることができた。私がベトナムに行こうと思ったきっかけ

けはこの SUSAP で行ける国の一覧を見たときに一番自分で行こう思わなかった国に行こうという風に考えたからだ。自分の興味のなかった部分へ興味を向けることにより、また新たなことを学べるのではないかと思ったことと、私は大学入学時から様々な国に行き、その地の観光や地域資源を見てまわりたいという風に考えていた為、聖ヨセフ大聖堂、バッチャン焼きなど歴史的な建物、焼き物があるベトナムに興味を持ったことも動機である。実際に行く前の私の中のベトナムといえばバイク、排気ガス、フォー、そんな漠然としたイメージだったが、実際に行ってみると、鮮やかなシルクや、表面が少しざらりとした質感の伝統的なバッチャン焼き、所狭しと並んだ細長な家、日本では考えられないようなバイクの量、そして独特な発音のベトナム語、どれも日本には味わえない事ばかりであった。

留学中は午前中にベトナム語の授業、午後はボランティアのベトナム人学生と一緒にハノイの観光地などへ訪れた。午前中の授業では3人の先生方からベトナム語を習ったのだが、3人中2人が英語での授業であり、普段から英語を使い慣れていない私にとっては英語を聞き取るだけでも一苦労な上、ベトナム語の発音や、意味、などを理解するのはとても骨の折れる作業であった。初日から自分の英語能力、理解力のなさに落胆した。授業内容としては、最終日のプレゼンテーションで自己紹介を7文程度でできるようになるというとても初歩的なことであったが、独特なベトナム語の発音は私たちには難しく、「婆さんのばーだよ」という風に説明してもらったのだが、日頃からあまり、発音を意識していないのでその例えも難しかった。先生方や、ボランティアのみんなは手で発音の波を作るなどして、分かりやすく発音を教えてくれた。ボランティア学生は日常会話を苦なくできるほど、日本語が堪能であり、改めて自分の語学力の無さ、ベトナム人の勤勉さを感じた。授業を経て、実際に校内の店や、学生に対して使ってみるとやはり、発音の部分で理解してもらえず、新たな言語を学ぶ難しさを痛感した。午後や、週末の観光地巡りはとても充実していた。

私が最も印象に残ったのはバッチャン焼きである。佐賀にも有田焼があるが、また少し違い、表面がざらっとしており、その質感が私はとても気に入った。バッチャンの釜はレンガと土でできており、妊婦のお腹の形といわれるだけありモコモコとした山形の釜がたくさんあった。昔はたくさんあった釜も今ではバッチャン村の中で3つまで減ってしまったそうだ。どこの国でも、焼き物などの伝統的な文化がどんどん機械化などされているのだということに改めて感じ、そのような文化を国内だけでなく、国外の方まで、後世まで伝えることができればいいなと感じた。

次に、私の留学をより豊かなものにしてくれた食事について話したい。私は、今までアメリカ、シンガポールの2カ国を訪れたことがあるのだがどちらもあまり食に関して満足した事がなかった。「ああ、海外の味だ」という感じであったり、漢方がとても強かったり、大味すぎて2日目で食べる事が苦痛になったこともあった。しかし、ベトナムの食事はどれも美味しく、毎回の食事がとても楽しみであった。私の印象としては薬物がとても多いイメージであった。パクチー、シソ、ドクダミ、ミントなど、様々な薬物がどこの店でもボウルに山盛りに盛られて出てきた、その薬物を春巻の皮で巻いたり、ブンチャーなどに好みの量だけ入れて食べるなど、日本ではサラダや何かの付け合わせでしか食べない薬物を沢山のせて食べるのはとても新鮮であった。最初はどんな味がするのかわからなくて少しづつしかのせていなかった薬物も終盤にはこの葉っぱはどんな味がするなど、少しづつわかってきて、大盛りにして食べるようになっていた。

次に、1番私が日本と違うと思ったのは、やはり交通である。初めに言った通り、私のベトナムに対するイメージの中にバイクがあったが、やはり、ベトナムは私が思った以上にバイクの国であった。空港を出た瞬間からバイクの音、クラクションの音がして、ああ、ベトナムにきたのだなという事を改めて感じた。空港からホテルに向かう道でも舗装されていない道を牛などと一緒にバイク、バス、自動車

が走る光景は絶対に日本で見ることはできない。また、道路ではバイクが車やバスの周りをどんどん追い越し、曲がる時にはバスはバイクの切れ目を勢いよく曲がり、日本ではあり得ない車間距離で通行する。5時から7時のラッシュ時には歩道にまでバイクが侵入しており、歩行者優先という言葉はないのだな、と感じた。また信号を守らないバイクのために警察官が立っており、渋滞はベトナムでは日常になっている事をひしひしと感じることができた。初日にはボランティア学生に先導されておどおど道を渡っていた私たちだったが最終日には自分達だけで渡れるようになった、ここで気付いたのが、変に小走りしたり、止まったりするのではなく、普通に歩くのが一番いいということがわかった。普通に歩いていれば、バイクが自然によけてくれる。また、日本では危険を示すクラクションだが、ベトナムでは自分の存在を示すように慣らされていたのが印象的であった。バイクがバスのすぐ後ろを通るときにプーと鳴らし、バスの横を通り過ぎていく、これだけバイクが多くても事故をこの二週間で一度も目にしていないのはその交通状況にあった交通の仕方を皆がしているからだろうと感じた。

このベトナムでの研修を終えて自分の語学力の無さと、新たな言語を学ぶ難しさ、そしてどこの国でも抱える地域の特産物をどう伝えていくかなど、さまざまな点に気付かされた。この経験を生かして、将来や、近い未来、大学生活の中のさまざまな場面で生かしていきたいと思う。私たちに貴重な経験を与えて下さった先生方、ボランティアの学生など皆さんに感謝したい。



バッチャン焼の窯

「初めての海外留学」

芸術地域デザイン学部地域デザインコース

1年 安川 理澄

私は小学校の頃から英会話教室に通っていたこともあり、小さい頃から海外に大変興味がありました。しかし時間や金銭的な問題でそれまで海外留学には行けず、今回のハノイ外国語大学への留学は私にとって大きな経験となりました。

初めてベトナムの地の空気を吸った瞬間のことを今でも鮮明に覚えています。もわっとした空気と日本とはどこか違う種類の暑さが私の体を包み込み、明らかな日本との気候の違いに本当にここがベトナムなのだと妙に自分自身で納得しました。車でホテルまですぐに移動しましたが、日本ではまず見られない光景が広がっていました。見渡す限りのバイクの量です。中には3人乗りで運転する人や、携帯を見ながら運転する人もいました。自動車も車線無視して、右往左往に各自が進みたいように運転していました。信号もあまり意識していないのか、曲がりたときに曲がり、自分が進みたいだけのためにクラクションは鳴り響き、通行人のことなどまるで眼中にないのではないかと不安になるほどでした。日本ではあり得ない光景に戸惑いました。滞在先から大学まで徒歩での移動でしたが、最初は車やバイクに轢かれるのではと不安で足がすくみベトナム人学生に助けってもらってやっと渡れるほどでした。しかし最終日には私たちだけで恐れずとも信号を渡ることができ、慣れとはすごいものだと思えました。国が違うだけでこんなにも交通マナーやルールが変わっていることに驚きました。

私たちは二週間、平日の午前は大学内でベトナム語を勉強しました。私は最低限のベトナム語も知らずに授業を受けましたが、現地のベトナム人の先生がとても親切で熱心に一から教えてくださいました。3人の先生方に授業をしていただきましたが、一人を除いては日本語をほとんど知らなかったの基本的には英語でベトナム語を学びました。私は韓国語を学んだことがありますが、その際は日本語

で学んだため理解が容易でしたが、英語で学ぶということは英語の理解がまず必要になるので大変でした。先生方は易しい英語を使いましたが、私の能力が低いせいで意思疎通が難しいことも多々ありました。先生に伝えようとしても文法が出てこないで、聞き取ろうとしても単語しか拾えませんでした。小学校から英語を学んできましたが、肝心の海外でうまく使えないのは悔しいし、もっとコミュニケーション英語を頑張らなければならないと、危機感を抱きました。また日本人は全体的に会話能力が低く、日本の英語教育の在り方を改める必要があるとも思いました。ベトナム語自体は文法構造が日本人に理解しやすいと聞いたことがありましたが、その通りで、特に難しいと感じることはありませんでした。しかし発音が難しく、微妙な発音の違いや日本語にはない音があるため苦戦しました。そのため授業の一環としてベトナム人にベトナム語で道を尋ねた時には、私たちの発音の悪さによく伝わらないことが多くありました。違う言語を習得するのは思っていた以上に難しかったです。

一方ボランティアたちの日本語能力の高さには本当に驚きました。日本語専攻の学生たちだと知らされてはいたのですが、彼らは達者な日本語で私たちを歓迎してくれました。博物館や神社に行った際にはまるで日本語専門の通訳の人のように「王朝」や「将軍」など難しい言葉も難なく使いベトナムの歴史を私たちに教えてくれました。私と同年か少し上であるだけなのに流暢に、英語はもちろん日本語まで使えるトリリンガルであることに本当に尊敬しました。彼らにどのように日本語の勉強をしているのか聞いたところ、将来のためだという学生がいました。ベトナムは今経済発展が活発でその上で多くの外国企業が進出しているそうです。ハノイで一番高いビルだと言われている LOTTE タワーは韓国が作ったもので、街中には西洋を感じる建物も多くありました。中でも日本の建物も色々なところで見ました。私たちが宿泊したホテルには日本の居酒屋が入っていたし、大きな橋などは日本の支援で作られたのだという話も聞きました。このように日本

と密接な関係であるため日本語を学び将来に役立たいと思ったそうです。日本の漫画や歌が好きで理解したくて学んだという学生もいました。遠い国でもこのように深い繋がりがあるのだと驚きました。また食欲に学問を学ぶ姿勢は本当にかっこいいと思いました。私ももっと将来を視野に入れ大学でしっかり学びたいと思いました。

私は芸術地域デザイン学部の地域デザインコースに所属していて、将来は記者になりたいと考えています。記者は現地に行き感じたことを言葉にする仕事です。ベトナムへ直接行き街並みを見て感じるものがたくさんありました。まず建物と建物の間隔がほぼないことに気づきました。密接しているので、工事の際はどうしているのかと思ったらベースのコンクリート以外を壊し、新しい家や店を立てているようでした。全て壊そうとすればかなり大掛かりな作業になりそうでした。また、歩道は歩行者だけでなく、バイクも普通に通っていたので整備が間に合っておらず、穴が空いていたりレンガがむき出しになっていたりしました。そして屋台がとても多く路上に机をと椅子だけ並べている簡単な造りのお店もたくさんありました。街中に屋台があり、とても賑やかで明るく活気にあふれていました。教科書やネットだけでは分からない、現地の様子を肌で感じたことは多くあり、刺激的な経験になりました。

今回の留学では言語取得の難しさ、英語の大切さ、現地へ行くことの面白さなど自分にとって大きな経験になりました。また、現地の方から学ぶこともたくさんあり、自分自身を振り返るきっかけにもなりました。もっと英語の能力を高めて、自分のスキルを磨くため、いろんな国へ行ってみたいです。



ベトナムの風景

「ハノイでの経験・出会い」

理工学部理工学科 1年 川端康平

私は2週間、ベトナムのハノイへ短期留学をしてきた。「実力がついてからでは遅い」と考え、海外に行き自分の意識を変えたいと思い、今回のプログラムに参加した。初めて行くベトナムで、出国1週間前に部活で鎖骨を骨折したこともあり、非常に不安な気持ちでの留学となった。

午前中はベトナム語の授業、午後は博物館や史跡などの観光が行われた。午前中のベトナム語の授業では、教えてくださる教師3人のうち2人から英語でベトナム語を習った。英語での授業の初日は、あまりの情報量の多さに頭がパンクしそうになってしまった。ベトナムの大学は日本と違い教師と生徒の距離がとても近い。そのこともあり、授業中に先生からよく話しかけられたり、発言を求められたりしたのだが、日本の学生はもともと授業中に発言することに慣れておらず、また、とっさに話せる英語力を持っていなかったため幾度となく言葉を詰まらせてしまった。また、英語で話せたとしても、先生から「Your English is crappy」と冗談を言われその時は笑っていたものの、後々になって私たちの英語力、コミュニケーション能力の無さに落胆した。これは日本の大学に通っている限り、決して経験できることではないと思う。また、ベトナムの大学生は、とても勉強熱心であると感じた。ハノイ国家大学外国語大学のキャンパス内を歩いていると、木陰などで勉強する多くの学生の姿を見た。外語大ということもありベトナム語以外の言語を勉強する声が聞こえてきたことは印象的だった。そして驚くことに大学の授業は早くて7:00から始まるそうだ。午後には博物館などに訪れ、ボランティア学生の子たちが、展示物などの説明をしてくれた。とても詳しく、それも日本語で教えてくれたのだが、自国に対する知識がなくては成せないと感じた。少なくとも私は日本の文化、歴史をここまで詳しく英語で説明できる自信がない。日本の大学生は、他国の大学生より勉強をしないと聞かすが、実際に感じた。

新興国であるベトナムの首都ハノイには歴史的な建物が多く残っている一方、旧市街から離れればいたるところで高層ビルが建設されており、とてもエキサイティングな街である。大量のバイクが街中を駆け回っており騒々しさがあるもののベトナムの伝統的な習慣なども息づいており、アジアならではの雑多な雰囲気があった。日本の高度経済成長期を知っているわけではないが、高度経済成長期真っただ中の日本もこのような雰囲気であったのではないかと感じた。2週間ハノイでの暮らしの中で感じたことがある。それは、さまざまな店（飲食店やカフェ、両替屋、タピオカ屋…）の営業時間が日本に比べて長いことだ。そして、店の従業員は常にフォーマルではなく、自由であると感じた。ここで両国にあるタピオカ屋で比較してみよう。日本での営業時間は10:00~22:00であるが、ベトナムでは8:00~23:00であった。この一例のように、ベトナムでの多くの店が朝早くから夜遅くまで、日本より長く営業しているのだ。よって私たちも時間に左右されることなくハノイの街を楽しむことができた。仮に日本人も同じ営業時間で働くことになると「働き過ぎだ」と社会問題になってしまうだろう。ではなぜベトナム人は長時間働いているのだろうか。それは就業時間の過ごし方にあると思う。私たちが見たベトナム人の働き方の大半はとてもラフであった。基本的に座ってスマートフォンを触っており、客が来ると接客をするというスタイルだ。日本人からすれば違和感を覚えるかもしれないが、接客に問題はなく、この働き方は合理的だと感じた。ベトナム人のフレンドリーな民族性も関係していると思うが、日本とは大きな違いであると感じた。

ハノイに滞在中、ショッピングセンターやコンビニに行ったのだが、日本製品の多さに驚かされた。とくに菓子類に多くの日本製品が見受けられた。日本で英語の書かれた製品を目にするが、そのような感覚でベトナムには日本語の書かれた製品が多く置いてあった。また、和食も浸透しており、ショッピングモールのフードコートなどには「うどん」や「寿司」がベトナム料理屋と同じように軒を連ねて

いた。街中でも、日本でよく目にする外食チェーン店を見つけた。日本人にとっては、安いと感じると思うが現地の人からしてみると決して安いわけではないと思った。和食は広がりつつあるが外国人にとっては敷居がたかいのではないか感じた。職以外にもボランティア学生のみんなはJ-popや日本のアニメ、人気ドラマをよく知っており日本の影響を色濃く受けていると感じた。また、日本以外にも韓国の文化が入ってきていた。Lotte Mart というディスカウントストアが数多く進出しており、地上 65 階建て(267m)の LOTTE CENTER HANOI という超高層ビルも建っていた。これは世界を感嘆させるベトナムのランドマークとなっているらしい。そして、LOTTERIA の進出でマクドナルドを見ることがほとんどなかった。

今回の留学ではたくさんのことを学ぶことができた。私たちの語学力の乏しさや想像を超えて世界に進出している日本の文化と和食。日本にいただけでは決して味わうことのできなかつたことが、留学を通してたくさん見えてきた。そして、2 週間私たちとずっと一緒に行動してくれたボランティア学生との深い友情が芽生えた。毎日のように私たちをいろいろなところに連れて行ってくれ、ベトナム語ができない私たちに代わってたくさんサポートしてくれた。ボランティア学生のおかげで私たちは安全に楽しく留学することができた。とても感謝している。今回の留学を通して目に見えるような成果は得られなかったかもしれない。しかし、新鮮な体験のおかげで、見解を広げ、新たな価値観に気づくことができたと思う。そして、私たちの意識を大きく変えることができた。



ボランティア学生との旧市街観光

「短期海外研修に行って」

理工学部理工学科 1 年 北林陽良

私はハノイ外国語大学プログラムに参加して、ベトナム人学生の「日常体験」をさせてもらった。しかし、それは私たちにとって「非日常」の連続であり、とても毎日が刺激的であった。

第一に、交通事情。まず、市街地のバイクの数の多さとその雑踏ぶり。日本とはバイクと乗用車の台数がまるで逆であり、道路を走っている 8~9 割がバイクであった。ハノイ外国語大学の学生もバイクを使用しており、大学内の駐輪場には大量のバイクが停められていて、日本ではなかなか見ることのできない光景だった。バイクは車道、歩道の区別なく走り回っていた。実際に私たちが横断歩道を渡っていると信号待ちしているはずのバイクが走ってくるが多くあり日本にいる時以上に周りに気を配って歩かなければならない。次に、バスの運転が日本に比べ、非常に荒い。全てのバスではないが、停留所で完全に停止することなく徐行するのみで乗客の方が気を付けながら降りている姿をよく見かけた。私たちがバスを利用したが、モタモタしていて乗り遅れそうになることもあった。日本は安全だとよく外国人が言う理由がわかった。

第二に、物価の違いだ。フォーが一杯約 40000 ドン(約 200 円)。タピオカも約 40000 ドン程である。バスの運賃が市内であればどこまで乗っても 7000 ドン(約 35 円)で固定されている。私が一番驚いたことは、ベトナムの学生に床屋に連れて行ってもらったが、カット+シャンプー+マッサージの値段が 80000 ドン(約 400 円)、しかも仕上がりはとても満足のいくものだった。その他諸々日本より値段が安いものばかりであった。しかし、日本食レストランに行くと日本とさほど変わらない値段だった。つまり、日本食は現地の人にとって高価なので、馴染みの薄いものであるのではないか。もう少し日本食に親しめる環境があれば良いのと感じた。

第三に、環境問題。排気ガスや光化学スモッグが日本より多いと感じた。その影響なのか、マスクを

着用している人が多く見受けられた。バイクの異常な多さはその一因であろう。歩道のブロックが所々外れているのもよく見かけ、歩きにくく感じたが、これもバイクによるものだと思われる。またごみの収集が平日昼間に行われているのにも違和感だった。私の実家の福岡市では平日の深夜にゴミ収集車が巡回する。そのため、生ごみの異臭などに気付くことはほぼない。そのことがとても恵まれていることに改めて気付いた。ハノイでもこのような環境整備が進めば、さらに住みよい街になるだろう。

また、私は現地の学生と食事を共にする中で気付いたことがある。レストランで店員が食事を運んできた後、「ごゆっくりどうぞ」などの言葉を付け加えることもなく、あっさり去っていく。客がいないときには、スマホを触ったりパソコンで動画を見て楽しんでいた、さらにはバスの運転通話をしながら運転していた、しかし、それに不快感を覚えたりはしなかった。さらに、現地の学生と旧市街やナイトマーケットでショッピングをしたが、様々な店が通りに並び、人がごった返している中で聞こえてきたのが「安いよー！」や「いらっしやい！」などの日本語である。つい聞こえてきた方向に顔が向いてしまった。これらのことからベトナム人の人間性を感じることができた。日本の接客マナーは、マニュアルに縛られており、心からの言葉ではないように聞こえ、硬い印象を与えてしまっているように感じる。それに比べ、ベトナムの人々は言語が通じないながらも人間味を感じさせる接客マナーだった。

2週間のベトナム滞在中で、自分の言語感覚の変化に気付いた。期間中、3名の先生にベトナム語を教えていただいた。1名は日本語でベトナム語を教えてください、他の2名は英語でベトナム語を教えてください。英語でベトナム語を学ぶことで、自分の中でいつのまにか英語が媒介語としてレベルアップしているのを感じた。英語でベトナム語の翻訳をし、日本語で英語を翻訳してやっと理解できる。英語が日本語とベトナム語をつなぐ架け橋になっていることに気付かされた。ベトナム語が入ることにより英語の重要性を感じた。

さらに現地の学生と2週間一緒に過ごしたことで気付いたことがある。現地の学生は日本語、英語が堪能であり、ついていけないことがあって、改めて日本人の言語能力のなさを痛感した。様々な局面で私たちをサポートしてくれ現地の学生のおかげで安心して行動することができた。

今回のハノイ外国語大学プログラムは、私にとって非常に収穫の大きいものであった。この経験を活かし、語学をさらにブラッシュアップし、自分の専門分野である機械工学の技術を学びに外国に行きたい。私は、高校時代に朝倉市に災害ボランティアで行ったことがあり、その経験から災害時に役立つロボットの製作を志している。そのための技術の習得や環境調査のためには、国内外のフィールドワークが必要不可欠であると思う。大学生活を通して多くの国を訪れ、見聞を深めることにより、世界のニーズを知り、必要な技術を身につけて社会に役立つ仕事ができるように、これから視野を広げ力をつけていきたい。



市街地に大量に駐車してあるバイク